「オヤジはどうして歌舞伎が好きなのか」

1956 年卒　小澤　雄一郎

この世に人として生を享けて質問されることで、もっとも難しいものは、ちいさな子どもから

ドウシテ、イツカラ、ソシテ・・・

と、聞かれることではないでしょうか。ついついまごついてとんでもない返事をしているうちに、子どもの関心は別の方に向かっているので救われることが多いのですが、大人になってしまった子どもからの質問となるとこれは又別です。

しかたが無いので、「どうして御飯はおいしいのかね」、と答えることにしています。

そう、私にとって歌舞伎と人形浄瑠璃はなかば御飯のようなもので、ドウシテ、イツカラ、という問いにはとても答えられるものではないのです。

思えば高校一年生の昭和 26(1951)年 3 月､ひょっとしたことから新築 3 ヶ月目の歌舞伎座に行き、“歌舞伎”なるものを見たのが始まりで、それからは毎月は愚か毎週とでもいうように劇場通いが始まってしまいました。気が狂ったとでもいうのか、慶應高校に歌舞伎研究会なるものを創設、大学の先輩方からは声を掛けていただき、大学での行事には誘いをかけてもらい、まだ高校の先生をしておられた池田弥三郎先生からは歌舞伎の見方の初歩をおしえていただき、ますますのめりこむこととなってしまったのでした。

歌舞伎の母は人形浄瑠璃と知り、三越劇場での文楽三和会に行ったところ、これまた夢中。歌舞伎同様かそれ以上にのめりこんでしまいました。

それにしてもあれから約 60 年見続けた歌舞伎ですが､最も感謝するところは東京のどこかでほぼ毎月一定期間上演されているということです。こんな幸せなシステムを考えた先人には何とお礼を言ったらいいのでしょうか。もし、人形浄瑠璃でもこんなことが可能だったら・・・なぞと夢みたことがありましたが、それもこれも平和であればこそです。政変ぐらいはあってよし、不景気なぞもあってよし、戦争だけはあってはなりません。歌舞伎は戦争を嫌う演劇です。人の心や情けをしみじみと歌い、語り、舞い、ざわめく演劇です。そして何よりもそれを引き継ぎ成長させていく演劇です。

ところで、平成 22(2011)年は私の入門(?)した歌舞伎座が、いよいよ建て直しのため無くなるそうです。感無量というところですが、今の歌舞伎の人気振りを見ると新しい役者達のために新しい器が必要なのかなと、喜ばしくもなります。

私が見始めた頃の役者といえば、海老蔵、梅幸、松緑、彦三郎、幸四郎、歌右衛門、勘三郎、らがほぼ 40 代でそれはそれはキレイだったし、元気でした。

新しい歌舞伎座は、今の花形たちが祖父たちの同じ年齢ぐらいの時に出来上がるのでしょうか。残念ながらその頃の私はヨボヨボ爺でどうなっていることやら。でも、周囲に迷惑を掛けなければやはり見に行きたいものと願っているところです。

歌舞伎研究会員らしいことも書かなくてはいけませんでしたね。

昨年の驚異は会員の渡辺　保君の新著『江戸演劇史』上・下でした。*江戸演劇史*を真正面から取り上げたおそらく最初のものではないでしょうか。当たり前のことでしょうが、歌舞伎を振り返るときにその生まれ育った江戸というものを知らなかったらどうにもならないことでしょう。その当たり前のことが実はもっとも難しいものなのでしょう。それを渡辺君は見事に実現してくれました。歴史学者・石上英一(東京大学教授)が口を極めて賞賛され、昨年度刊行物でお読みになったなかで最もすぐれた作品三作の中にもあげられておりました。歌舞伎論はいろいろあり、ありすぎるかもしれませんが、史として位置づけたものは間違いなくこれが初めてでしょう。これを基に又優れたものが出てくるかもしれませんが、何としてもすばらしい著作です。

見たものでは三津五郎丈の最近の大きさを褒めたくなります。「娘道成寺」、「六歌仙」、殊に「六歌仙」は見たい見たいと思っていた変化舞踊としてのあり方が見られ、大感激でした。文屋ではほとんど夢見心地でした。そして、極め付きは「引窓」。私が毎日でも見ていたいお芝居はこれです。高校生か大学初めの頃、初代吉右衛門で見たときから何人の与兵衛さんとお会いしたか知れませんが、どの与兵衛さんとお会いしても毎度感激しております。その中でも三津五郎丈のものは何か別格の面白さでした。

やっぱり、研究会員らしいものは書けそうにありませんでしたので、このあたりでご勘弁ください。研究の方は少しくおきまして会員としてはできるだけ参加したいものと考えております。

次のときはもう少し研究会員らしいものを書いて提出いたします。

そうそう、思い出しました。学生の頃の研究会誌は「浅葱幕」というのがありました。ガリ版刷りの素朴なものでしたが、懐かしく思い出されます。

会誌の成長を祈りつつ

平成 23(2011)年 1 月 11 日

小澤　拝